

のだけど、ひどい被害を受けないような工夫というのをいろいろにやっています。

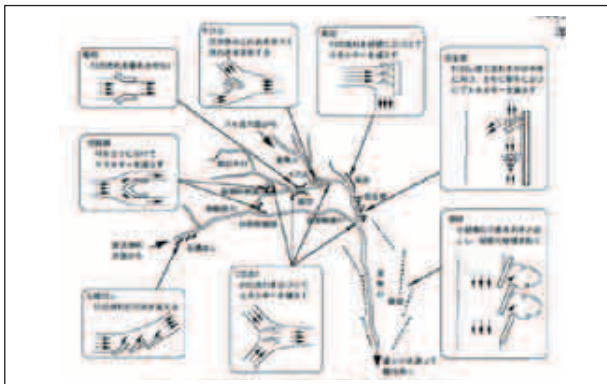


図 信玄堤 (実際の設計第6巻より)  
(グラフ信玄堤 千二百年の系譜と大陸からの潮流、  
和田一範編、山梨日日新聞社、2003 の図に加筆)

これは、現在のようすです。細かい事と全然違う発想で、向こうの山の中の夜叉神峠(やしやじんとうげ)のところから出てくる水を直線の水路でまっすぐに持ってきています。そして両側をきっちりとやって、全部堰堤を作っているのもう典型的に信玄の時とは違う考えでやっています。これは考えが変わっただけではなくて、実は人間が使えるエネルギーが信玄の時代に比べて1万倍になっています。10の4乗倍くらいになっているのです。だいたい人間の出せる出力が0.1馬力ですが、今、この辺で使う建設機械の馬力数は500馬力から1000馬力です。大型のを持ってくるとそれくらい起きます。ですから一人の人間が操作できる、出せる力が10の4乗倍違ってきて、それでやるとこういう事が出来るようになってきたのです。基本的な根本が変わっているという事を見ないといけません。

次は地震です。地震についてみんなが考えるときに、地震が起くるのは防げないから防いでも被害が小さくなるようにしようと言うのですが、もうちょっと考えないといけない。本当に起こった時にどうやって逃げるか、人の死ぬ数を減らすのにどうしようかと考えると、本当は今みんなと言って、やらなければいけないすごく大事な事は、既存不適格というものなのです。早く対策を打たなくてはいいませんが全くやっていません。これは、ほとんど日本人全部の怠慢で、このためにひどい事が起きます。

それ意外にもこういう事があります。「失敗学」では、勝手に言っているのですが、あり得る事は起こるといふふうに考えています。発生確率が低くても、論理的にあり得るといふ状況は必ずどこかで起こるといふふうに考えています。そうすると、それを取り込んだ本当の対策をやっていないと、ひどい事で人が死ぬぞと。それをいくつかお見せします。

阪神の震災が起った時に自分が歩いた経路を赤く線で引きました。東灘から歩いて三宮へ行ってことごとく崩れているのを見ました。この時に見た一番印象の大きいのは何でも壊れるという事です。しかし、それと同時に解ったのは、建築基準法というものがいかに効果の大きいのかです。1981年の建築基準法の規準に則って造ったものは、木造でも鉄骨でも鉄筋でも何にも壊れていない。しかし、それより前の1960年頃に作った建物というのはことごとく崩れています。特に高度成長期の最初の頃に作ったものはみんなダメで、建物がみんな壊れている。そういうのを見ながら物を考えると、本当にやらなければいけないものというのは、やはり、社会全体としてきちんとして法律を作り法律を実行して、既存不適格をきちんと排除し、何年か後には、あなたの建物が壊れるから、10年目には国が半分補助するから立て直しましょうというような政策をとらないといけません。

これが、瓦礫と化した神戸の街の姿です。自分で撮ってきたものですがこんな壊れ方をします。



写真 瓦礫と化した神戸の街(1995年2月9日畑村撮影)

これは、あまりにも有名な神戸市役所の2号館です。5階の上の所のひしゃげているのが、1階分の建物です。それで、下